

RESEARCH CENTER FOR THE FUTURE CITY DESIGN
CORRESPONDING TO GLOBAL ENVIRONMENT PROBLEMS
RESEARCH GROUP FOR THE FUTURE CITY DESIGN
CORRESPONDING TO GLOBAL ENVIRONMENT PROBLEMS
<http://future-cities.ynu.ac.jp>

【講演資料】文部科学省革新的イノベーション創出プログラム
(COI STREAM) 拠点公募について

横浜地域部会／横浜国立大学研究戦略推進本部／シニア URA
今井 寛 氏

// 第2回地球環境未来都市シンポジウム(活動報告とパネルディスカッション)//

地球環境未来都市(横浜・都留)へ向け～ICTプラットフォームを活用して～

都市をリ・デザインする

2013年6月15日(土) | 13:00 → 17:00 | 参加無料

横浜国立大学教育文化ホール

1. 文部科学省 COI 拠点公募のコンセプト

平成 25 年度から始まった革新的イノベーション創出プログラムは、大学の研究コミュニティの間では非常に注目度が高く、文科省も目玉政策として力を入れています。最終的には COI をつくり、大学や企業や自治体などが集まって革新的な研究をするわけですが、特に今回強調されているのはバックカスティングの考え方です(図 1)。これは、技術から将来をつくるのではなく、「少子高齢化先進国としての持続性の確保」「豊かな生活環境の構築」「活気ある持続可能な社会の構築」という 10 年後の社会ビジョンについて、企業と大学と研究機関が一つ屋根の下で研究開発・事業化を推進するということです。

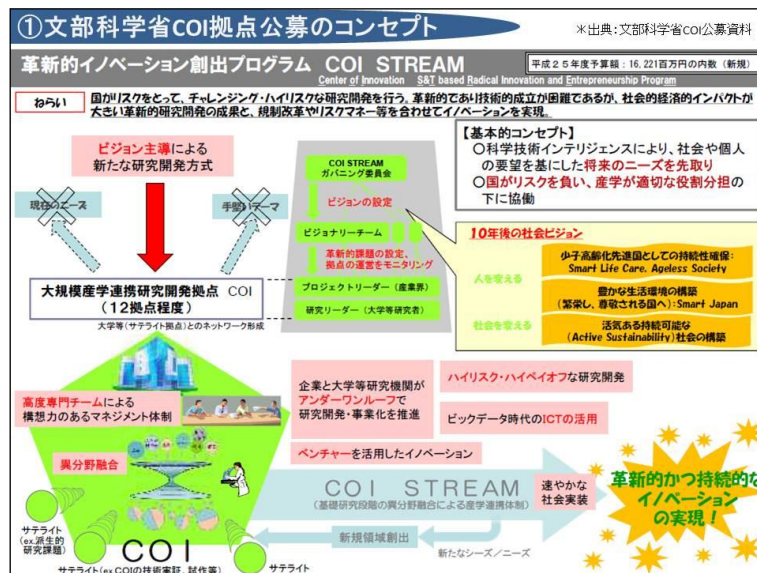


図 1

3 月から 4 月にかけて、このようなビジョンを実現するためにどのような拠点をつくれればいいかということで、公募がありました。

2. 横浜国立大学の拠点提案のコンセプト

われわれは、「統合 ICT プラットフォームの構築を通じた都市のり・デザイン～誰もが主役として輝く持続可能な社会の実現～」ということを提案しています(図 2)。この中では、特に情報の分断による社会の不透明化とイノベーションの阻害を課題に挙げています。

例えば、高齢者が 100%福祉の対象になると、社会負担ばかりなので-1.0 です(図 3)。しかし、高齢者が持つ力の 3 割を社会貢献の方向に使うと、 $-1.0+0.3=-0.7$ となり、社会負担が減ります。

これは、65 歳以上は働かされるとか、-1.0 を+1.0 にするために若者の仕事を奪ってしまうというわけではありません。少しのことで変わるのです。ただ、その少しの希望を誰が持っているかは分かりませんので、例えば、

私が 70 歳になったら子どもに勉強を教えることができるという希望を表明して、そのデータを登録する必要があります。そこに ICT プラットフォームを使えないかと考えているわけです。

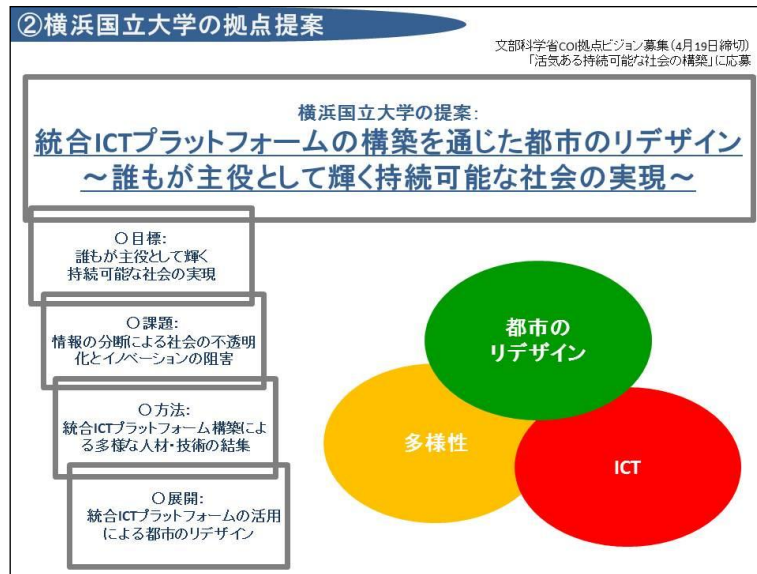


図 2

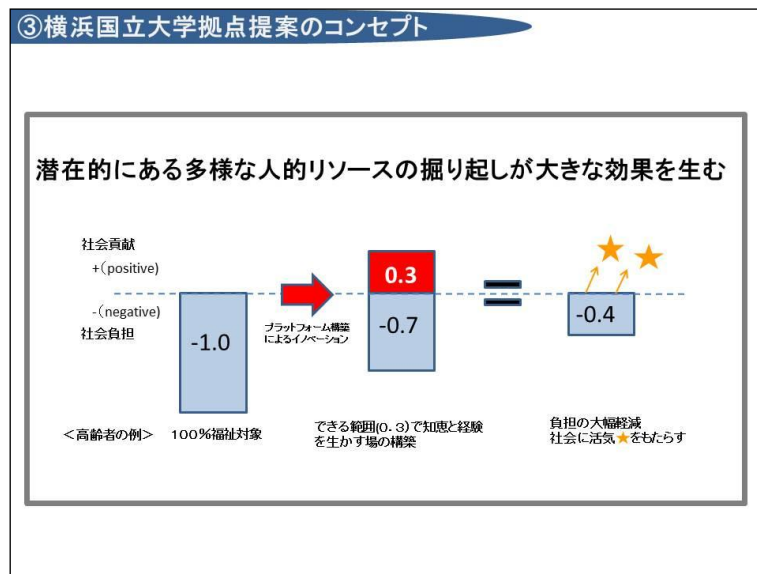


図 3

そういった、世の中に存在している人が貢献できることや技術を ICT プラットフォームに結集し、それを基に都市をリ・デザインしてはどうかということを提案しました(図 4)。

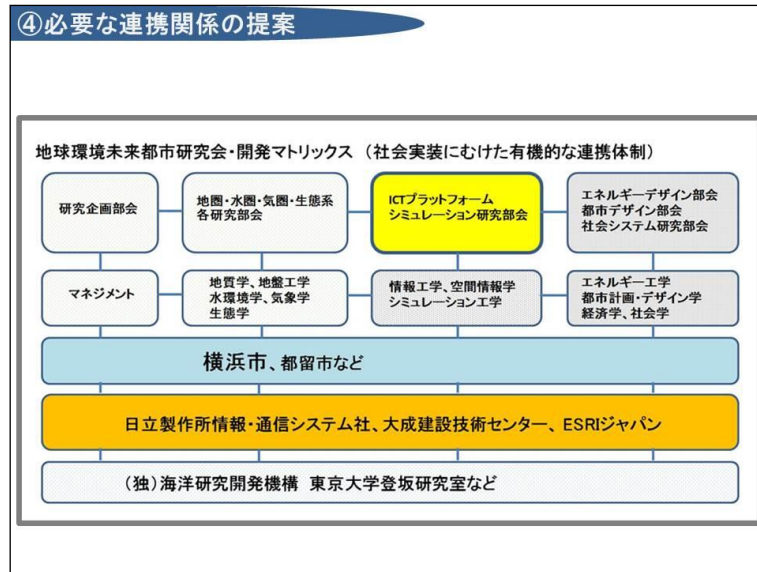


図 4

3. COI 拠点ビジョンの具体的なソリューション例

その後、6月11日に、「ビジョン実現のためのキークエスチョン」が示されました(図5)。三つ目のビジョンである「活気ある持続可能な社会の構築」では、「制約なく、個人がいきいきと生きていける社会とそれを支える社会システムをいかに好循環で両立できるだろうか」ということが新しく出されています。

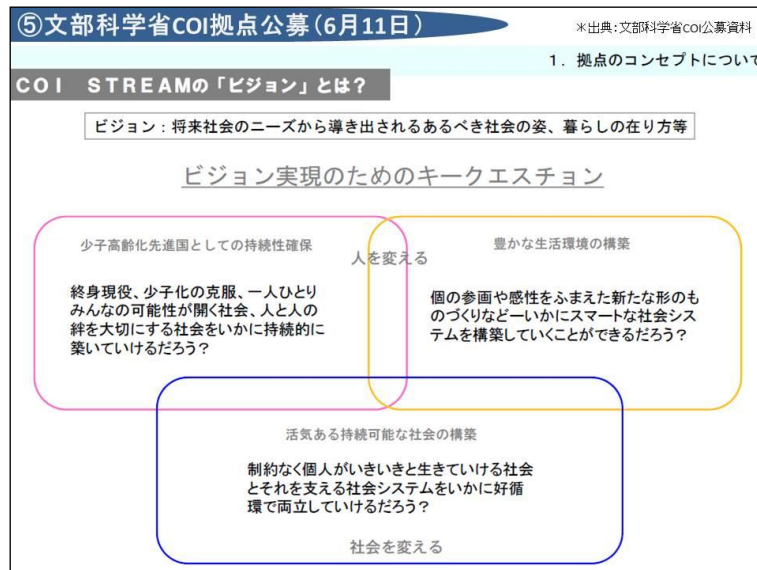


図 5

その中で具体的なソリューション例が示されているのですが、例えば「人が生きる持続力のある高度都市システムの実現」では、「住民が幸せで活気ある暮らしを実感できる高機能で持続的なまちづくりを実現するため、税制等も併用しつつ、社会的利益と個人の利益のバランスを考慮して都市機能を適切に設計する」という、われわれが提案しているような話が入っています。また、「機能的な中央業務地区、ゆとりある生活を支える住宅地、資源の循環利用を可能とする山林」は、先ほど北山先生がおっしゃったインナーハーバーの話から都留に至るまでのコンセプトです。

4. 横浜国立大学の研究プロジェクト計画

われわれが考えているプラットフォームは、自然データや社会データだけではなく、世の中のニーズ、個人がどのような社会貢献を希望しているかというデータなども入れてシミュレーションする機能、さらにコミュニケーションできる機能も持つものです(図6)。つまり、データベースでもあり、シミュレーションでもあり、コミュニケーションのネットワークの基幹となるものです。そういったことを踏まえて、新しい都市モデルを考えていきたいと思ひます。

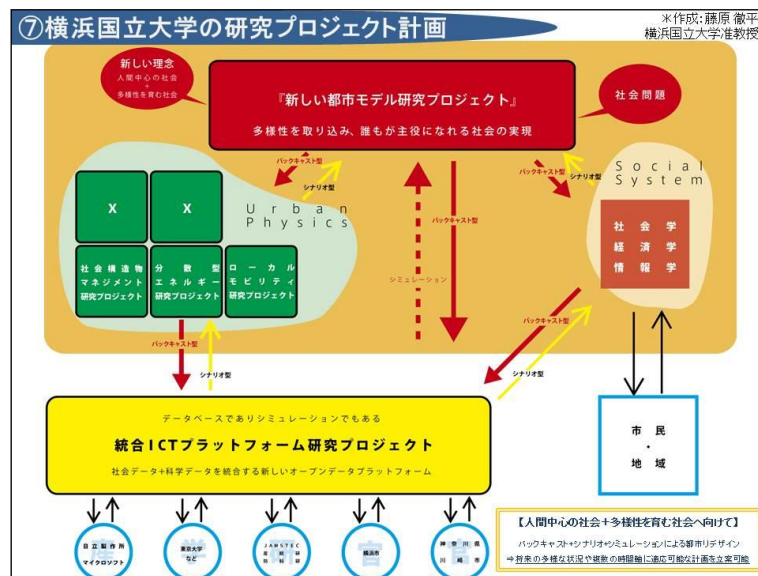


図 6

その際にわれわれが主張しているのは、本テーマで研究を進める舞台としては横浜が一番だということです。横浜は魅力ある都市ですが、一方で、決して特殊な都市ではありません。ただ、みんなが参考にできるような都市です。問題もたくさんありますし、都会から山林に至るまでいろいろな場所があります。そのようなことをアドバンテージとして、COIに挑戦していきたいと思ひています。